

1 研究主題

生きる力を育む書写学習のあり方

—— すすんで取り組み、書く喜びのもてる学習をめざして ——

2 研究主題について

(1) 「生きる力を育む」とは

国語科の目標の中にある「伝え合う力」の1つの手段として、「書く力」が挙げられる。書くことを通して、自分の気持ちを相手に伝え、相手の気持ちを理解しようとする意欲をもち、人とかかわりの中で主体的に生きようとする力を育成することは大切な課題である。書写学習の目標である「文字を正しく、ていねいに、整えて、読みやすく書く」ということは、相手に自分の気持ちを伝える際の重要な要素の一つである。

また、自分の力を向上させようと粘り強く練習に励む気力、体力を養うことは生きる力と深くかかわっていると考える。

そして、得た力を自分の日常生活を豊かにするために、積極的に生かそうとする気持ちこそ、21世紀を生きる子どもたちに求められている力ではないかと考え、学んだことを生かし、自ら新しいことに挑戦していくことこそ「生きる力」と捉える。

(2) 「すすんで取り組み」とは

学習していく中で生まれる「もっと上手になりたい」「あのような字が書けるといいな」と自らの思いや願いをもち授業に取り組む姿、相手のことを思い、自分の考えを「書く」ことを通し伝えようとする姿、書写学習で得たものを自ら生活の中に生かしていく姿と捉える。既習の書写力を大切にし、一層よいものに発展させようとする気持ちや態度は、様々な文字や言語に広く目を向ける力、分析的にものを見る力などにつながり、日常の文字生活を豊かに充実させていくと思われる。

(3) 「書く喜びのもてる学習」とは

学習の中で自分の良さや友達の良さを見つけ、認め合い、高め合いをする喜び、学習したことを生活の中で生かすことのできる喜びと捉える。

児童にとって新鮮な経験や気づきがあり、書写の技術が上達したり、文字のもつ特性を発見したりできる喜びをもつことができ、児童が満足感・充実感の感じられる学習と捉える。

3 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

今、社会で求められている「生きる力」の育成を目指す観点から、書写のあり方を考えるとき、生活に生きて働く文字感覚や書写能力の育成が大切だと考えられる。

書写は伝統的な日本の文化であり、文字を正しく整えて書くことは書写を含む国語科の学習にとどまらず、生涯にわたって人として生活を営んでいく上での基本的能力ともいえる。しかし、昨今では大人も子どもも文字を書くということから遠ざかる生活にあり、書く文字も形や筆順などは正確でないことが多い。書写学習を充実させることは、生涯教育の基礎作りと考えられる。そして、これからの学習や生活の中で書くことに喜びを見い出し、日常生活の中で役立てようとする意欲を育てることは豊かな自己実現のためにも大切なことだと考える。

書写の学習においても、技能重視の教師主導型の授業から児童一人ひとりがすすんで取り組み、喜びのもてる授業への転換を図る時期にきていると考えられる。書写力の向上と同時に、広がりのある様々な活動や経験を通し「生きる力」の向上に努めていきたいと考える。

(2) 学校教育目標から

本校では、学校教育目標を「人間性豊かで 心身ともにたくましく 実践力のある子どもを育てる」と設定し、「明るくて思いやりのある子ども」「よく考え工夫する子ども」「元気でやりぬく子ども」をめざす子ども像として具現化に努めている。それらは、子どもをかけがえのない存在として捉えるものであり、児童に生きる力を育むことを目指すものである。

書写学習においても、最後まで粘り強く取り組む体力や気力、友達と励まし合い向上していこうとする気持ちなどは学習の基盤となる大切なものである。書写学習全般を具現化の場と考え、目指す子ども像に迫りたいと考える。

(3) 児童の実態から

児童を取りまく文字環境は多様で、雑誌・テレビ・パソコンなど様々な文字に出合う機会に恵まれている。しかし、一方では自分で文字を書く機会が少なくなっており、文字を正しくていねいに書くことができるとは言いきれない。鉛筆を正しく持つことのできない児童、姿勢のくずれやすい児童、丸文字・漫画文字を学習場面で使う児童等、気になるところである。

昨年度の実践により、児童は、書写は自分の課題を見つけ、より良い文字へと自己実現を目指す課題解決学習であることを意識できるようになってきている。人と比べるのではなく、自分を見つめようとする気持ちも少しずつ育ちつつある。

このような実態をふまえ基礎・基本的事項の定着を図り、児童一人ひとりが達成感のもてる授業を展開すること、文字環境を整備し、文字感覚の育成に努めることなどを通して、研究主題に迫りたいと考える。

4 研究仮説

児童一人ひとりの書写力に応じて活動を支援すれば書く意欲が向上するであろう。加えて、自分の喜び、相手の喜びとなるようなこちよい活動を経験すると、得た力を自らの生活に生かそうとする「生きる力」をもった児童が育つであろう。

5 研究の内容

研究仮説を受け、書写学習における学習過程について、以下の研究を進めることにした。

(1) 「子どもが追求する学習」であるためには

- ・指導過程の工夫
- ・児童が課題意識をもつための工夫
- ・環境の整備
- ・教材・教具の工夫

児童の自ら学ぶ意欲を中心とした課題解決的な学習を取り入れ、楽しく書写にかかわることのできる授業の展開が大切であると考え。児童一人ひとりが文字を分析的に見ることにより問題点や課題を見つけ、めあてに沿って解決に向かう学習過程、一人ひとりの課題に応じためあてをもつための支援のあり方、課題を解決するための糸口となる教材・教具の開発等の研究を通して「子どもが追求する学習」に近づきたい。

(2) 「多様な学習」であるためには

- ・児童が書くことへの興味・関心を高めることのできる場の設定
- ・広がりのある学習活動
- ・効果的な指導形態

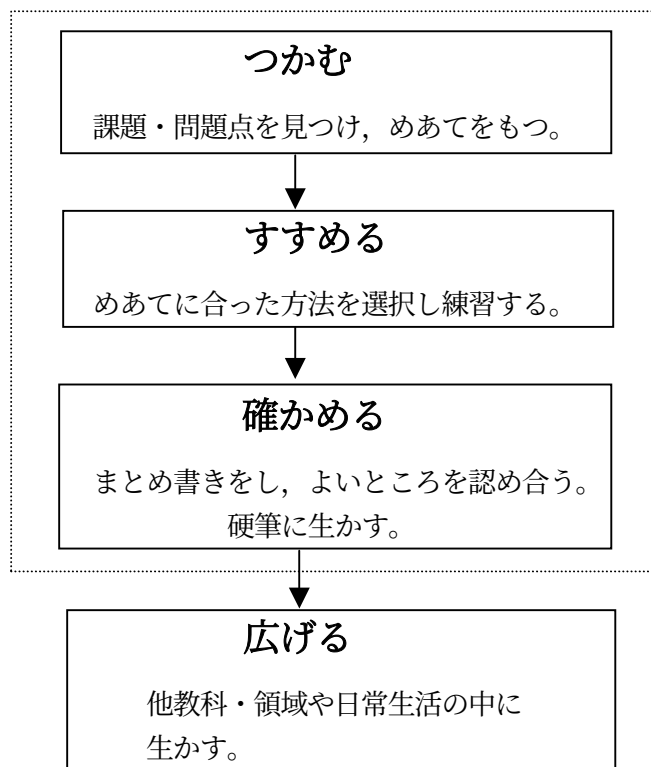
学習の楽しさを知る、あるいは学習したことを生かしていく喜びを感じるということは日常の文字を書く活動の全てへの意欲につながるものと考え。相互交流の場の設定や、相手意識をもつての活動や、T T 指導形態における細かな支援を通して児童が「多様な学習」を経験できるようにしていきたい。

(3) 「発展性のある評価」であるためには

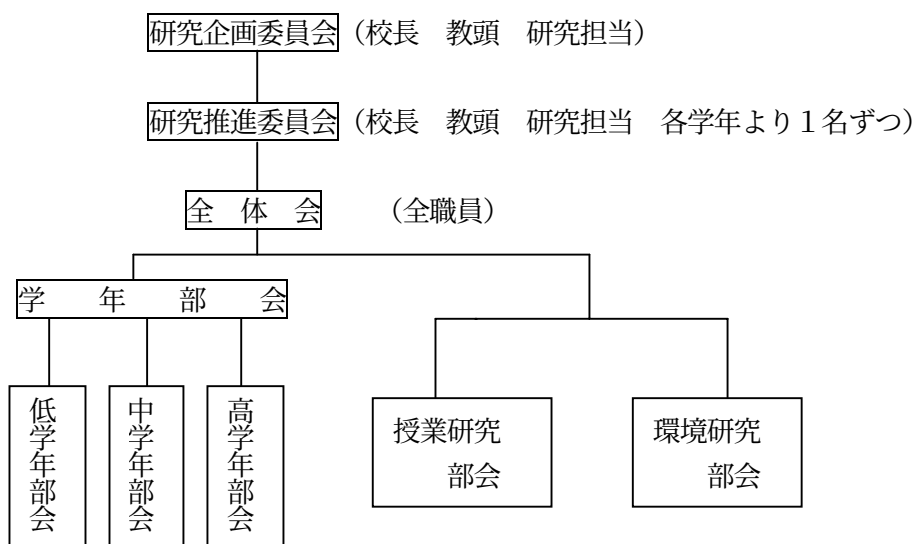
- ・励みになる評価
- ・向上するための自己評価

評価は次への意欲につながるべきものであり、学習の成果を評価する体験を積み重ねることにより、やがて確かな書写力が身につくものと考え。自己評価で伸びや良さを感じ友達との相互評価や教師の評価で認められる喜びを感じながら、意欲の持続化を図り「発展性のある評価」を目指したい。

6 学習過程



7 研究組織



8 研究構想図

